島根・三田谷（さんただに）Ⅰ遺跡

1　所在地　島根県出雲市上塩冶町
2　調査期間　一九九四年（平6）四月～一二月
3　発掘機関　島根県教育委員会
4　調査担当者　鳥谷芳雄・山岡清志・平石　充
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　縄文時代後期～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

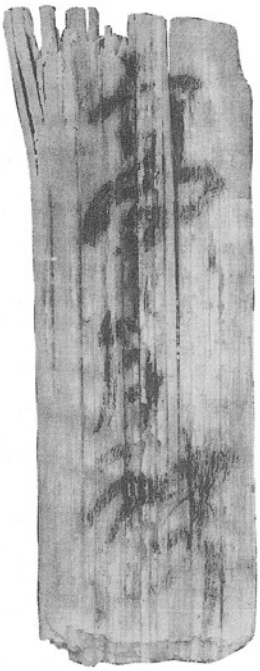
三田谷Ⅰ遺跡は神戸川右岸の低台地に位置する集落遺跡である。一九九四年度の調査地点は、集落跡の縁辺部にあたり、谷奥からの小河川の流路が谷地状地形として検出され、ここから縄文時代後期から中世にかけての遺物が整理用コンテナ約四〇〇箱分出土した。

今回報告する木簡は一点で、この谷地状地形の覆土から発見された。木簡の含まれる土層からは、広く古代以前の遺物が出土している。木簡以外の遺物には、封緘木簡状の木製品一点、「□宅」「日□」「坂」「友」「○」「中」などの墨書・ヘラ書土器、金属製巡方一点がある。

（今市・木次）

8　木簡の釈文・内容

(1)　「高岸神門　(86)×38×3　019



上端は表裏両面からのキリ技法によって切断されており、下端は欠損している。表にはケズリによる整形が確認される。「高岸神門」の文字は続けて書かれているが、「高」の上には連続する文字が見られないことから、上端は原形をとどめると思われる。『出雲国風土記』には神門郡高岸郷がみえ、そこでは神亀三年（七二六）に表記を「高崖」から「高岸」に改めたとされているので、本木簡もこれ以降のものと推定できる。なお、神門郡高岸郷については、本遺跡北北西約二㎞の塩冶町高西がその故地と考えられ、本遺跡は同郡日置郷の周辺にあたるのではないかとされてきた。今回報告した木簡は、古代の神門郡と郷との関係を考える上で重要な資料となろう。

（平石　充）

埋蔵文化財写真技術研究会編

『埋文写真研究』第六号

「特集　とぶ、つぶれる、ねむい、どうしようもない」　井本　昭
「基礎講座　文書撮影―複写」　杉浦　秀昭
「紫外線写真撮影」　金井　杜男・三原　昇
「現場撮影における色の再現性―青いポジの原因―」　池崎　智詞
「回折現象について―画像への悪影響―」　井上　直夫
「画像データを用いた印刷の進行と利用方法」　木村　恭也

このうち木村氏の記事は、木簡写真を例に用いて、フォトCDデータと赤外線スチルビデオデータを印刷に利用する方法を紹介したもの。別冊として文化財写真集『高橋猪之介寫眞集英』（B5判九五頁）が付いている。

B5判、一三五頁、カラー図版多数
定価三五〇〇円
（バックナンバー　三号三〇〇〇円、四・五号三五〇〇円）
送料　四冊まで五〇〇円、一〇冊まで一〇〇〇円、
一一冊以上は無料

申込先　〒六三〇　奈良市二条町二―九―一
奈良国立文化財研究所内
埋蔵文化財写真技術研究会　佃　幹雄　宛
TEL　〇七四二―三四―三九三一
郵便振替　〇一〇五〇―九―九九三〇
埋蔵文化財写真技術研究会